

論文審査の結果の要旨

氏名 金野美奈子

本論文は明治期から現代までの日本の事務職を事例として、職場の秩序編成におけるジェンダー・カテゴリーの意味の歴史の変遷を詳細に描き出すことを通じて、職場という社会的世界のジェンダーによる意味づけのしかたが不変なものではなくて歴史的に形成されたものであることを明らかにすることを目的としている。本論文は、序章と終章を含めて八つの章からなっており、まず、序章において、労働におけるジェンダー・カテゴリーが労働におけるジェンダーに関するこれまでの研究において、ジェンダー・カテゴリーが研究者の観点から通時代的に普遍的で同一の意味をもっていたと前提される傾向があったと指摘し、それに対して、人々自信の経験において捉えられたジェンダーの意味の変遷をたどるといふ本論文の課題の意義を論じている。第一章は明治期の産業化と女子教育の進展の中で、女性事務職が創出されて職場の中に位置づけられた際のジェンダー化様式が空間分離を特徴とするものであったことを明らかにし、つづいて第二章では、戦間期においてジェンダー・カテゴリーは学歴秩序の中に組み込まれる傾向があったこと、さらに第三章では、戦時期において女性事務職が拡大する中で、職場における女性性の意義が発見されたことを明らかにしている。第四章は、戦後の労働世界における平等主義のもとで、家族を養う稼ぎ手としての男性という扶養者モデルがジェンダー秩序を支配するようになったとし、第5章は、そうしたジェンダーの社会的意味と職場的意味の整合化が日本的経営および日本の能力主義と適合的であったと論じている。第六章は、1980年代後半以降、女性総合職の導入と男性を含む雇用形態の多様化の進展の中で、職場の階層的意味秩序において客観的な能力の観念がしばしば男性性と結びつく傾向があったと指摘する。終章では、歴史の変遷を振り返りつつ、職場の意味秩序そのものが多様化していき、男性モデルが揺らいでいるもとで、ジェンダー・カテゴリーの融解と引き続くジェンダー化との相克があるものの、ジェンダー化の様式を相対化する視点が拡大していくのではないかと展望している。

本論文は、一次資料を丹念に参照しながら、職場を生きる人々自身の意味世界におけるジェンダーの意味の歴史の変遷を、「ジェンダー化の様式」など独自の理論概念を駆使して分析しており、歴史的事例の説明にやや不十分な点も指摘されないわけではないが、労働とジェンダーの社会学の進展に大きく寄与する極めて独創性の高い論考であると評価される。

よって、本審査委員会は、本論文が博士(社会学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。